津山郷土館考古学研究報告第2冊

# 津山弥生住居址群の研究

……西　地　区……

近　藤　義　郎
渋　谷　泰　彦　編著

1957年

津山市・津山郷土館

## 正　誤　表

| 頁 | 行 | 誤 | 正 |
|---|---|---|---|
| 3 | 26 | 小中原に | 横野奥谷に |
| 19 | 8 | 補は | 補柱は |
| 21 | 12 | 混じだ | 混じた |
| 33 | 10 | 遺物の一覧表は下記の如くであるが，その大多数は | 遺物の大多数は |
| 39 | 30 | 両側ももと | 両側ともと |
| 43 | 1 | 文様表を示すが | 文様表を作つたが，省略し |
| 57 | 24 | 最前 | 最初 |
| 57 | 26 | 才六章 | 才Q項 |
| 59 | 32 | 沼 | 沿 |
| 62 | 21 | 関野博台 | 関野博士 |
| 81 | 26 | 才5図 | 才24図 |
| 84 | 5 | 才6図 | 才25図 |
| 92 | 1 | 結論 | 総括 |
| 英文 3 | 19 | Poteris | Potteries |
| 3 | 27 | Potteriy | Pottery |

津山郷土館考古学研究報告第2冊

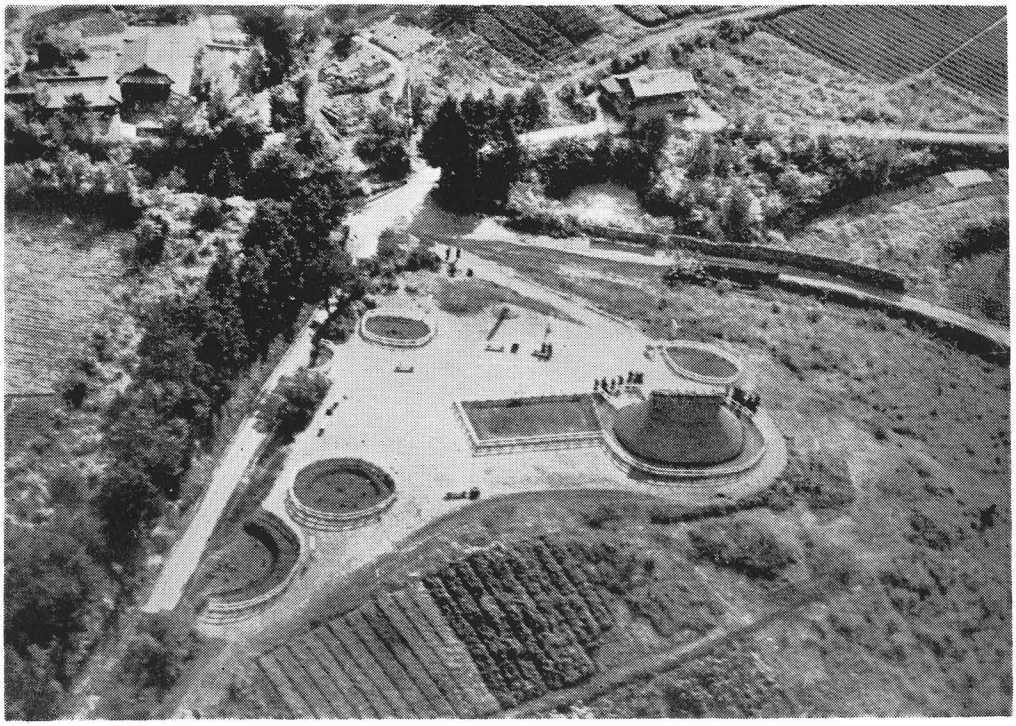
# 津山弥生住居址群の研究

……西　地　区……

近　藤　義　郎
渋　谷　泰　彦　編著

1957年

津山市・津山郷土館



保存復原された津山弥生住居址群西地区

# 序

戦後の混乱と動揺で，幾多の記録資料や，埋蔵遺物が，徒らに散逸破壊されてゆきました。このことは今なお一部方面に続けられて，折角の地方史料が，惜しくも闇から闇へ葬られたり，或は心ない人たちによる無理解な宝さがし的の取扱いもあつて，その間，首尾の関連性を欠ぐ資料としての，価値を損うことが少くありません。

即ち津山市におきましては，先年来，市立郷土館を設立，これら散逸し易い諸資料の保存管理と，一部公開展示の方法を講じまして，利用の便に供していますが，その一環として，さきには市内佐良山〻中宮古墳〻の完全発掘を行い，佐良山古墳群の研究と題する報告書才一号を発行いたしました。引き続き津山弥生住居跡の，発掘整理に着手，現在作業継続中でありますが，これが地域は相当広範囲にわたつていますので，今回才一期作業を終ると共に，一先づ中間報告として本書を発行，広く関係方面の御意見を聴いて，更に今後の計画進行上，遺憾なきを期すべく念願するものであります。

ちなみに，この種の事業と，その運営に就きましては，或は珍品本位の蒐集に，或は単なる観光的魅力を目的とした内容に陥りやすいものあることを，格別に警戒いたし，たとえそれが地味に過ぎて，公開と運営条件の間に，時には不釣合のものがあるとしましても，あくまで学術的にその系列を誤らぬよう留意いたしまして，ひたすら利用度を高めることに重点をおいています。

一方この目的をヨリ達成するため，館外に存在する発掘現場の，遺跡保存に対しましても，これまた教材公園として一般に提供することを唯一の理想とし，その間，決して思いつきの化粧や軽卒に現状の変更を施さぬよう厳しく警戒して，およばずながら努力している次才であります。

しかし昨今，地方自治体の財政事情は，その予算措置の上に，いろいろの面倒も伴いまして，前記の目的を充分達成するまでには，一面また容易ならぬものもありますが，今後とも万難を排して，所期の目的達成に精進いたしたいと考えています。

特にこの際，一言しておかねばなりませぬことは，中宮古墳発掘以来，岡山大学の諸先生がたから，終始御親切な指導と援助をいただき，今回もまた同大学講師近藤義郎氏，和気高校教諭渋谷泰彦氏らを中心に，この発掘と研究が進められ，その他の各方面から多大な協力を得て，本書発行の運びにいたりましたことを，ここにあらためて深謝し，謹んで敬意を表するものであります。

昭和３２年３月２０日

津山市長　**額田雄治郎**

# はしがき

美作地方における弥生時代遺跡，特にその住居址，集落の調査は，1951年における勝田郡奈義町御崎野遺跡の発掘以来，多くの人々によつて各地で進められ，様々な成果が收められてきている。真庭郡久世町大旦遺跡における貯蔵庫群の発見，勝田郡奈義町野田遺跡における高床倉庫址を含む住居址群の発掘，勝田郡日本原～勝央町にかけての夥しい集落遺跡の分布現状調査等々がそれであるが，多くは未報告のまま，現在それぞれに整理研究が進められている。山深い美作の地に農業生産がどのようにして開始され，如何に展開していつたかという興味ある問題はやがて次才に明らかにされていくことであろう。

本調査もそうした一連の研究作業の一つとして取り上げられ，そして行なわれた。今回は西地区についての調査結果のみをまとめたのであるが，本来集落はその全体の発掘調査によらなければ正しく把握でき難いことはいうまでもないであろう。勿論住居址個々についての研究も大事である。しかし実際は，集落の全貌を把んだ上でなくては，個々の住居址の評価を充分に正しく行うことはできないのである。その意味で，私たちは更に東地区の発掘調査が近い将来に行われることを心から希望している。そうした上で，本書において述べ得なかつた諸問題について論じたいと考える。

本書の公刊に当り，各方面から多くの方々の協力と援助とを受けたことを先づ銘記し，心から感謝の言葉を申し上げる。特に発掘開始以来今日に至るまで終始私たちを指導し激励して下さつた岡山大学名誉教授根岸博，東北大学教授浦良治，江原猪知郎，東京医科大学助教授中島寿雄の諸先生の御厚情に対して深く敬意を表明したい。

発掘後四年，理解ある関係者の努力によつて，本遺跡は見事に保存され，復原住居が建ち，気持よい見学設備と環境とが作り出され，立派な歴史教材公園として整備された。

本遺跡調査と保存とに寄せられた多くの人々の熱意に対して，本報告書のもつ貧しさを懼れつつも，なお限りない誇りと喜びとを感ずるものである。

1957年3月20日

岡山大学医学部才二解剖学教室内
考古学研究室にて
執筆者代表　近　藤　義　郎

# 津山弥生住居址群の研究

……西　地　区……

## 目　　次


才一章　調査の概要……近藤義郎……1

A　遺跡の立地

B　発見の顚末と調査開始時の状態

C　調査の概要と竪穴住居址の分布

才二章　竪穴住居址……近藤義郎……11

D　A住居址について

E　E住居址について

F　G住居址について

G　その他の住居址について

H　若干の考察

才三章　遺物……今井　堯……37

I　鉄器・石器・ガラス玉について

J　弥生土器について

K　若干の考察

才四章　竪穴住居址群の復元研究……渋谷泰彦……55

L　復元の意義

M　竪穴住居復元の現状

N　復元研究の方向

O　津山住居址群の復原

P　津山住居址群の重要性

Q　総括

才五章　調査の経過……近藤義郎・今井堯・神原英朗・岡本明郎……99

附　録　津山市山北一丁田遺跡……植月壮介・近藤義郎……105


**実測**……近藤義郎・渋谷泰彦・今井堯・神原英朗・岡本明郎・太田武・河本昌広・山田英輔・河本清・津山工業高校生徒・津山商業高校生徒・津山高校生徒

**製図**……島暁・近藤利子・今井堯・渋谷泰彦・近藤義郎

**写真**……近藤義郎・渋谷泰彦

# 挿図・図版・表・目次

## 挿　図


第1図　津山市地方地形図……2
第2図　津山弥生住居址群遺跡附近地形図……3
第3図　津山弥生住居址群遺跡西地区地形図……7
第4図　住居址及びトレンチ……8
第5図　A住居址及び外周平面図……13
第6図　A住居址中央柱穴断面図……14
第7図　A住居址炭化構造材出土状況……14～15
第8図　E住居址平面及び断面図……18～19
第9図　G住居址平面及び断面図……23
第10図　K住居址平面図……25
第11図　Mピット平面及び断面図……26
第12図　岡山県邑久郡邑久町辻畑の柱穴……30
第13図　A住居址発見鉄製鉈……38
第14図　石器類（石鏃・扁平片刃石斧）及びガラス小玉……39
第15図　〃　（叩き石・磨り石）……40
第16図　弥生土器（甕形）……42
第17図　〃　（壺形）……44
第18図　〃　（高坏形・器台形・鉢形など）……46
第19図　弥生各種土器胴部破片拓影……48
第20図　岡山県農家の小屋組み……70
第21図　A住居址構造材見取り図……72
第22図　A住居址の構造復元……74
第23図　A住居址復元構造の部分……75
第24図　E住居址の復元図……80
第25図　G住居址の復元図……83
第26図　津山市山北一丁田発見弥生土器……106
第27図　〃……107

## 表


オ1表　出土炭材寸法及び推定構造材……17

オ2表　各住居址計測表……29


## 図　版


オ1図版　津山弥生住居址群西地区の全景……

オ2図版　津山弥生住居址群遺跡西地区の地形・A住居址の全容……2～3

オ3図版　露呈されたA住居址……12～13

オ4図版　A住居址北半部の炭化構造材出土状況　其の1……14～15

オ5図版　A住居址中央柱穴・A住居址中央柱の倒壊状況　其の2……14～15

オ6図版　A住居址炭化構造材出土状態の部分　其の3……14～15

オ7図版　A住居址炭化構造材出土状態の部分　其の4……14～15

オ8図版　A住居址かや及び鉈出土状態……18～19

オ9図版　E住居址全容及び中央凹穴……22～23

オ10図版　G住居址の全容　其の1……40～41

オ11図版　G住居址の全容　其の2及び出入口の構造……40～41

オ12図版　石　器　類……48～49

オ13図版　弥生土器　其の1及び鉈……48～49

オ14図版　弥生土器　其の2……48～49

オ15図版　弥生土器　其の3……48～49

オ16図版　岡山県真庭郡八束村四つ塚13号墳発見、家形はにわ……68～69

オ17図版　A住居址復原……76～77

オ18図版　保護、復原された津山弥生住居址群……76～77

オ19図版　A住居の復原作業……104～105

オ20図版　発掘の状況……104～105

第一章

# 調査の概要

近藤義郎

A 遺跡の立地

B 発見の顚末と調査開始時の状態

C 調査の概要と竪穴住居址の分布

## A 遺跡の立地

津山盆地は，北の中国山脈と南の吉備高原に挟まれて東西に長く伸び拡がり，美作国の主要な地域を形成している。同じ岡山県にあつても，瀬戸内に面する地域に較べて，気温がやや低く，降水量はやや多い。その詳細については才4章における渋谷氏の記述を才1図に掲げた地形図と

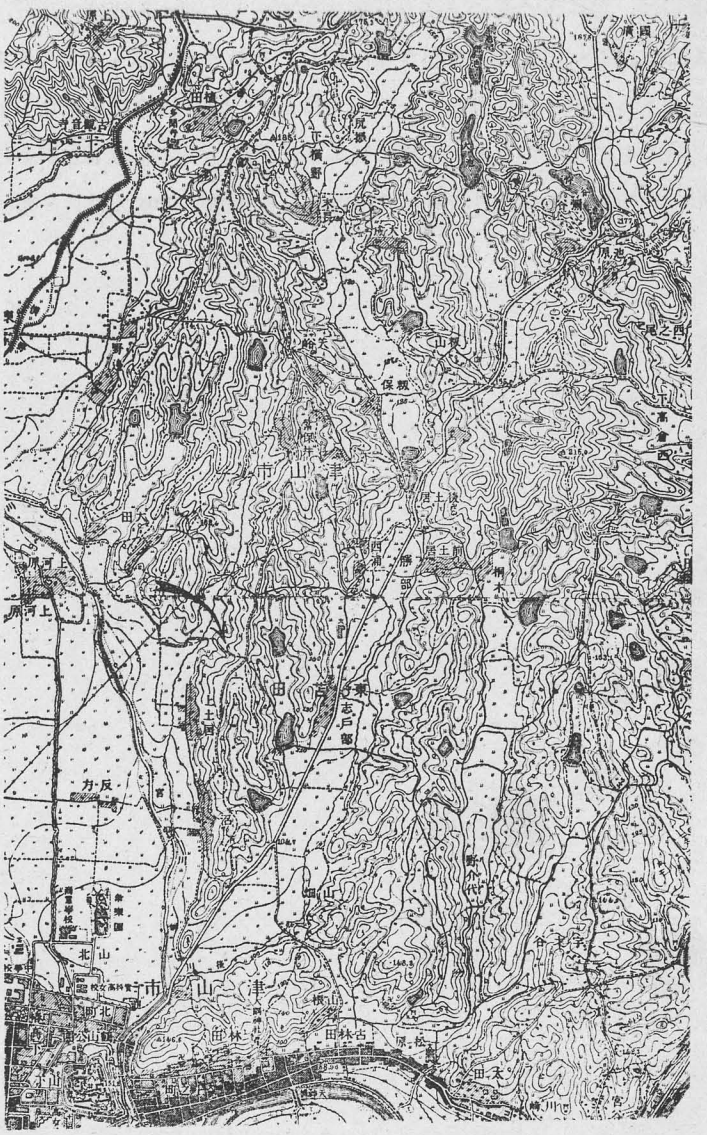
才1図　津山地方地形図　　Fig. 1

共に参考にして頂くこととして，ここではもつぱら遺跡附近の地形立地について述べることとしたい。

この津山住居址群と称せられる遺跡は，津山市大字沼及び大字紫保井，更に大字志戸部が接するところで，3つの大字にまたがつている。当初は西地区の大字名をとつて，沼遺跡と呼ばれていたが，整地作業の後，津山市の歴史教材公園として復原保存されてからは，津山弥生住居址群遺跡と呼ばれるようになり，今日に及んでいる。

上　津山弥生住居址群遺跡西地区の地形　　下　A住居址の全容

さて津山市の東北方には，中国山脈のふもとから派生して南に伸びる才3紀層丘陵が，大小多くの谷をその間に抱き，くねくねと幾重にもなつて拡がつている。比高はほぼ平均して30m～40mで，丘頂はなだらかな平坦部を作り，多く雑木林又は近年の開墾による畑地となつている。丘陵と丘陵との間の谷は，ゆるやかな傾斜をもち，小川が流れ，また丘陵側面から湧水が，恰好な谷水田地帯となつている。丘陵のほぼ全面にわたつて，表土はいわゆる黒ぼこ（黒土）となつている。この黒ぼこは酸性が強い土壌で，その直下の赤褐色の土と共に，火山灰の堆積層であると考えられているが，赤褐色を呈さないのは，森林腐蝕土壌の混在によるものであると説明されている。




才2図　津山弥生住居址群遺跡附近地形図　　Fig. 2

こうした津山市東北の丘陵群の西端に当る丘陵，……高田村安田附近に源を持つ後川と，小中原に源流を発する横野川～宮川とに挾まれ，中拡がりではあるが殆ど南北に長く伸びている丘陵があるが，その主軸をなす丘陵が，西方上河原の冲積地を望みうる位置にかかつた丘頂一帯の部分に，本遺跡は位置する。この部分は，南に伸びて来た丘陵が，やや東西に張り出しを見せており，東西約100m，南北約50mにわたつてなだらかな平坦部を作つている(才2図)。遺跡は発掘及び表面調査によつて知られた限りでは，上の平坦部分においてのみ確認されている。この地点も全面に黒ぼこ（黒土）が見られるが，一般に丘頂は薄く，下方は厚い。さてこの部分は東西に小丘が張り出しているため，東西ともその南北に小さな谷を作つている。これらの谷には，丘陵の地下水が湧出し，西北の谷を

除いて，現在段々式の水田が経営されている。西から西南にかけて，津山市の主要な穀倉地帯である上河原—山北の冲積低地を一望し，その視界は広くそして美しい。南と北と東には，同じ丘陵がうち続き，北東方向に一際高く聳えている那岐連峯を背負つている。冬期にはみぞれが多く，発掘中に私たちもまたそれに悩まされたが，特に北乃至北西から吹きつける風は強くそして冷たい。なお遺跡の丘頂は附近冲積地からの比高約30m（西）～35m（東）を測る。

## B　発見の顚末と調査当時の状態

### 発見の顚末

津山方面から高田村の方向へ通ずる旧道は，現在の道路に沿つて，東地区の灌木林の中にかすかな面影を残している。今から約２～３０年前，旧道の不便を避けるため，丘陵を巾広く断ち切つて現在の新道をつけた。当時その工事に参加した一人によれば，一部から炭がかなり出土したとのことである。しかし当時は遺跡について，積極的な注意は寄せられなかつたようである。それから1952年の冬に至るまで，道路の断面に黒々と竪穴住居の痕跡が存在したのにも拘らず，深く注目されないままに過ぎ去つた。その年の春，津山商業高校の平野勇氏等によつてはじめて考古学上の遺跡として注目され，津山郷土館にその報せがもたらされた。

道路の西側の断面に認められた黒ぼこの落ちこみは二ヶ所にあり，北側の一ヶは大きく，南側の一ヶは著しく小さかつた。何れも落ちこみの下底は水平となつていたが，左右の両端に明らかに浅い小溝の存在が認められた。大形の一ヶの中央より僅かに南によつて，太い柱穴を示す深い黒ぼこの落ちこみ部分があつた。道路の断面であるため，冬期における霜くづれならずとも，崩壊は日に日に進んでいるように見えた。津山市及び津山郷土館がその保存をかねての発掘調査を決意し，私たちにそれを告げたのは，その後間もない晩春のことであつた。当時，蒜山原の考古学的調査を企画し，実施しつつあつた私たちは，その年の晩秋を迎えて，ようやく発掘の開始に至つたのである。（その後の経過は才５章『発掘の経過』を参照されたい。）

### 調査当時の状態

南北に走る道路によつて，遺跡は東西に分断されているので，便宜上，東地区・西地区と呼んで記述することにする。前項で指摘したように，西地区は丘陵の端部に当つており，調査当時その上面のほぼ一帯は畑となつていた。その開墾は，太平洋戦争中に行われたものであるが，それ以前は松樹や灌木の生い茂る山林であつたという。開墾及び畑の耕作は，黒土の下の赤土にまでは殆ど及んでいない。また開墾時及び耕作に際し，出土品に特に注意が向けられた事実は無かつたようである。

西地区に対して東地区は，灌木及び若干の松樹で構成される山林の相貌を呈しているが，なおその中心部一帯が土塁に囲まれて草地となつており，仔細に見れば，もと畑であつたものが放棄された跡であることを示している。聞くところによれば，土塁は牛市場の関係で設けられたものであり，畑の放棄はつい近年のことであるという。

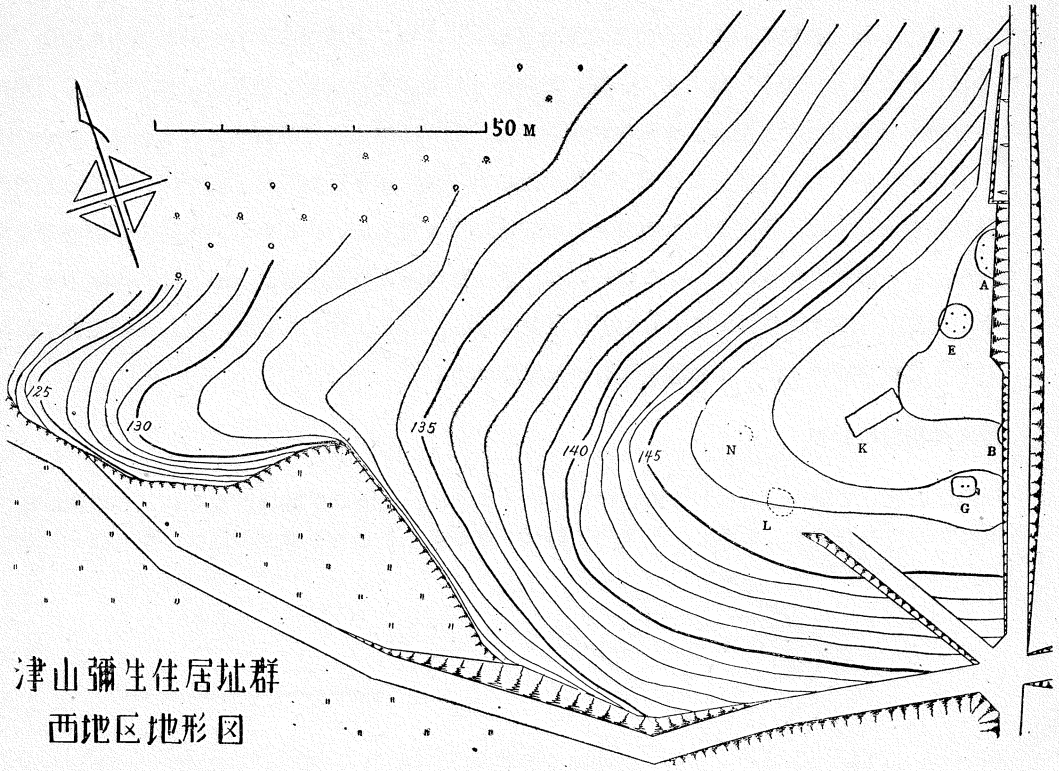
以上のような状態の下に，私たちは表面の調査を行つたわけであるが，西地区では土器片がほんの僅か点々と畑の間に分布していた。土器片はすべて弥生土器で，破片の多くは細片であつた。そのほか西地区では，扁平片刃石斧１，石鏃１が採集された。東地区は土塁内において，西地区

以上の遺物の散布を示していたが，同様にすべてが弥生土器の小破片であり，それ以前又は以後の時期の遺物は，近代の瓦器を除いて，全く存在しなかつた。

## C　調査の概要と竪穴住居址の分布

### 調査の規模と順序とのあらまし

1952年の秋の発掘調査は西地区の一部に限つて進められた（才3図）。先ず道路に断面を見せていたA号住居址（大きい方）の外周表土の調査，続いてA号住居址の発掘に及んだが，同時に，才4図に示したほぼ東西のトレンチC（巾約1.3m，長約11m，深さは黒ぼこと赤土の境まで，




才3図　津山弥生住居址群遺跡　西地区地形図（1954年）　Fig. 3

従つて部分によつて20cm或いは50cmということになる。以下のトレンチも深さについては同じ）を掘り，更にこのCトレンチに直角にトレンチD（巾約1m，長約5.2m）を掘り，E住居址を発見した。また別にCトレンチの南側に，F（巾約1m，長約3m），H（巾約1m，長約4.8m），I（巾約1m，長約5.2m），C′（巾約1m，長約7.7m）の各小トレンチをひらき，Fトレンチにおいて，G住居址を発見した。A・E・Gの各住居址については，それぞれの外周の一部又は大部分をも含めて，ほぼ併行的に発掘を進めた。道路に断面を見せていた小さい方のB住居址については，周辺の黒ぼこの排除によつてその輪かくを確認したのに止まり，発掘は行わなかつた。なお，E住居址はその北西の一部が耕作者の都合によつて，発掘の延期を余儀なくされた。

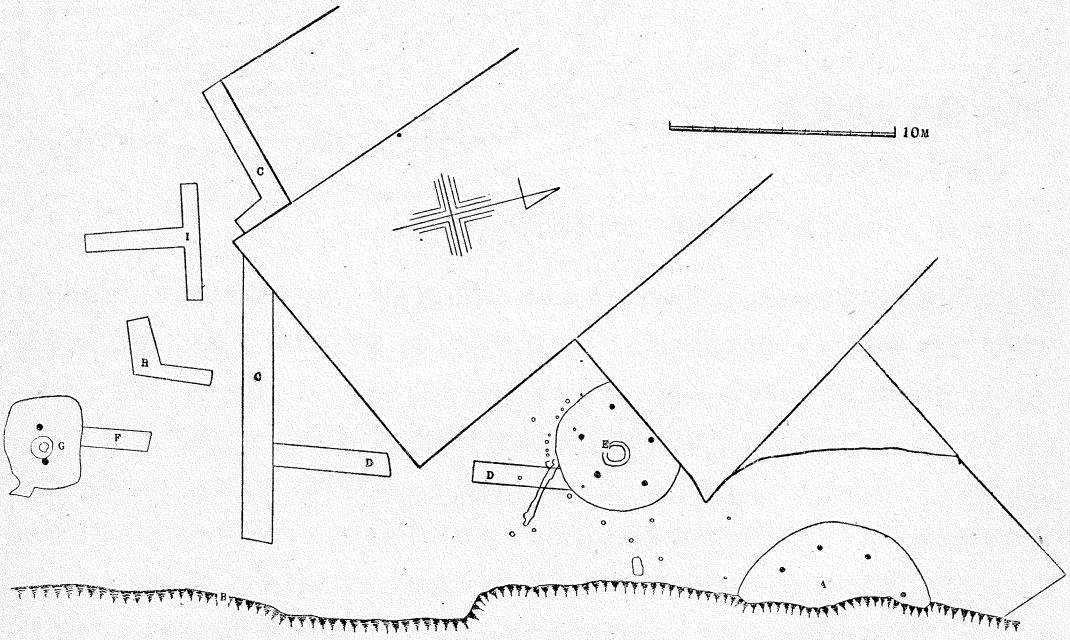
その後、1954年春，発掘されたA住居址の復原及び歴史教材公園建設のために，西地区南半主

要部分の黒ぼこをほぼ全面的に除去する作業が行われた。その際，念のために，北半の主要な部分にも7条の長大なトレンチ（巾約1m，深さは黒ぼこと赤土の境まで）を5m間隔で掘つた。その結果，北半部では住居址又は遺構の何一つも発見されなかつたが，南半分には二ケの竪穴住居址K・L及び一ケの竪穴住居址かと推定されるものNが発見された。しかし，これらの住居址は，その位置と形状の大凡そを確認されたのみで，発掘されることなく残された。E住居址の掘り残しの部分についても，若干の調査を行つたがなお一部は将来の調査に残された。

以上のように，西地区丘陵の上方主要地域の殆ど凡てに亘つて，一応の調査は及んだことになる。しかし，同一遺跡の他の部分である東地区については，発掘は全く行われなかつたので，遺跡全体にわたる発掘調査とはいえず，従つて発見された諸住居址も，集落の全体ではなく，集落の一部分を示すのにすぎない。また住居址のうち，私たちによつて発掘されたものは，半分ぼども残つていなかつたA住居址及びE・G住居址の計三址に過ぎなかつた。従つて，住居址群乃至集落の調査としては，不完全なものであることはいうまでもない。しかし，丘陵全体の完全な調査への途中の道でもあるので，ここで一先づ，才一次の調査の記録をまとめ，近く再開される筈の才二次発掘（西地区のB・K・L住居址及び東地区）にそなえることは，決して無意義ではない。そうした判断の下に，この調査報告は執筆された。

## 竪穴住居址の分布

西地区において現在認められる竪穴住居址のすべては，丘陵の中軸線乃至それより南側の緩い斜面にかけて存在する。しかし，丘麓や丘陵端などの低いところや北斜面には，全く認められて




才4図　住居址及びトレンチ　　Fig. 4

いない。この分布の状況は，先に述べた調査に基いたものであるところから，ほぼ原状に近いものと考えられる。また合計6（又は7）軒という住居址の数も，たとえ今後1・2の増加はあるにしても，ほぼ実数に近いと考えてよいであろう。この西地区竪穴住居址の水平分布範囲は，東西約45m，南北約42mを測り，垂直分布は，A住居址E住居址の附近（そこが西地区で最も高位）を0mとすれば，－3mの範囲内に集中する。以下個々の竪穴住居址の位置について述べる。

A住居址は，丘頂のほぼ平坦となつている部分に，E住居址は，その南西に最短距離5mを隔てて，やはりほぼ平坦をなす丘頂部に位置する。B住居址はA住居址の南々東約20mほどを隔てて，同じ道路断面に現われているが，その住置は南傾斜がようやくはじまろうとするところである。E住居址への最短距離は，約14mを測る。G住居址はB住居址の南西約6mを隔てた緩い南斜面に位置する。K住居址はE住居址の南西約11m，G住居址の北西約13mに当り，丘陵中軸の平坦部分に位置する。L住居址は，K住居址の西方約15m，G住居址と同様の南に傾斜する地点に存在する。Nは，K住居址の北西約15m，丘陵中軸ではあるが，西方丘端への緩い傾斜地にかかつている。

第二章

# 竪穴住居址

近藤義郎

D A住居址について
E E住居址について
F G住居址について
G その他の住居址について
H 若干の考察

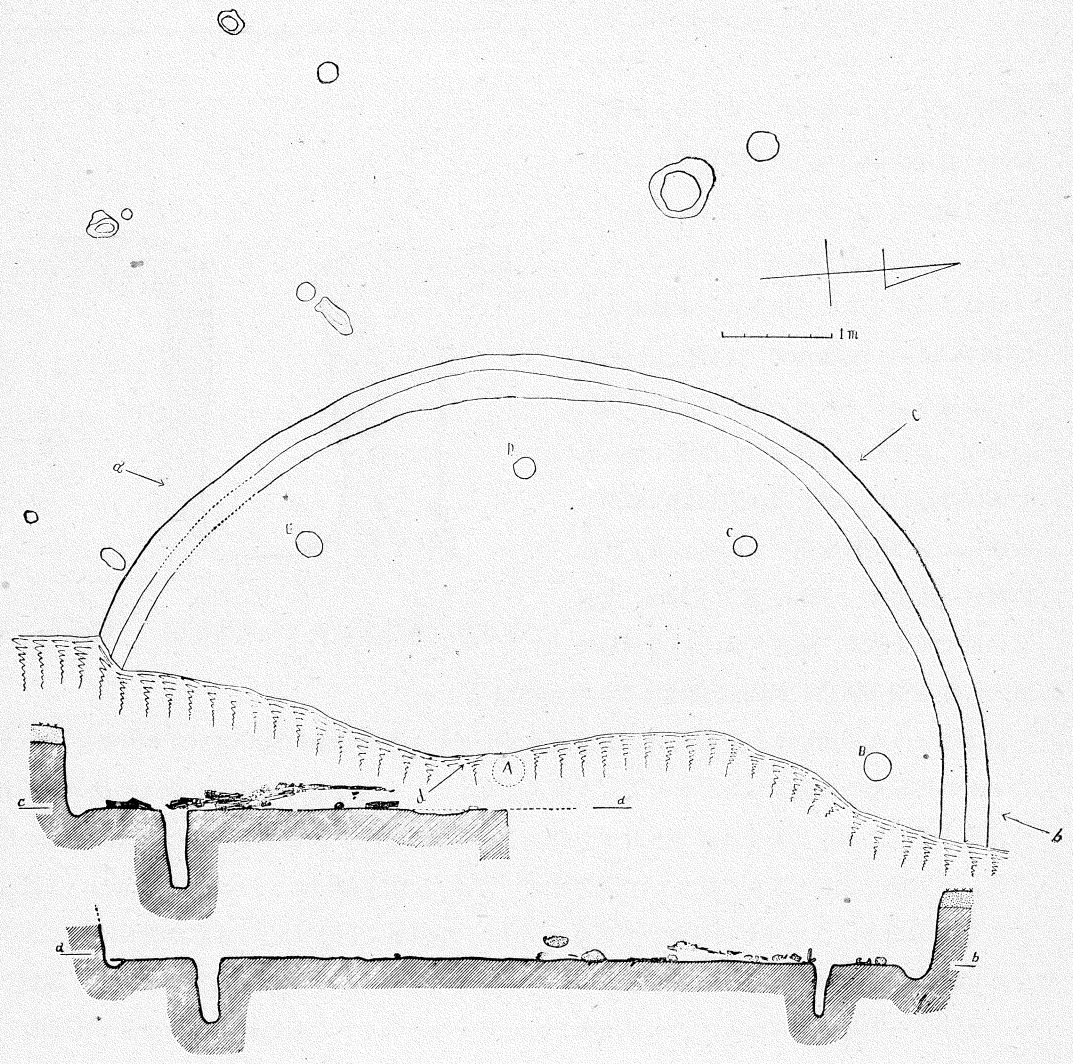
## D　A住居址について

道路によつてその半ば以上を切りとられていたが，その円のカーヴは，西地区住居址中とびぬけて最大の大きさを示している。周囲の現表土から約70～80cmの深さに，直角に近い傾斜をもつて，掘りこまれている。周囲の現表土における黒土の厚さは，約15cm～20cm前後である。壁の傾斜は，部分によつて殆ど変らない。平面は，過半部分が除却されているが，ほぼ半円を呈している。しかし，仔細に見てみると，北側と南側との円のカーヴがやや異なり，北側は通常の円カーヴであるのに対し，南側は楕円のカーヴを思わせるものがある。したがつて，もと楕円形であつたとする可能性が強く，もしそうだとすれば，その長い軸において西がかなり北にふれる方向となる。現在している部分の最大長は，竪穴壁上縁において約8m40cm，周壁下辺で約8m20cm，北端柱穴中央から南端柱穴を通つての長さは，同じく上縁において約7m90cm，現存部の奥行最大長は約3m60cmであるが，上の北端柱穴――南端柱穴の線を基準として奥行最大長を測れば約2m60cmとなり，その位置は，北から才二の柱穴の延長線上附近となる。このことは，先にふれた楕円形及びその伸びた方向に対する推定と一致する。

柱穴は現存部で4穴発見された。相互の間隔はほぼ相等しく，北から順次B柱穴・C柱穴…と呼べば，BとCとの間は2m37cm，CとDの間は2m07cm，DとEとの間は2m09cmを測る。壁からの距離もほぼ等しく，B柱穴から順次いうと，90cm，94cm，85cm，88cmで，周柱といつてよい位置にある。各柱の太さ及び深さについては，B柱穴は上縁の平面は楕円形で，その径27cm×21cm，幾分狭まりながら50cmの深さにほりこまれている。下底に近い部分の径は約15cm～16cmであるが，それから考えると，立てられた柱の径は凡そ15cm前後のものと推定される。C柱穴は上縁で，24cm×20cmの楕円，ほぼ垂直に近く75cmの深さに掘りこまれている。最も深い柱穴である。下底より10数cm高い個所での径約14～15cmであることから，立てられた柱の径は凡そ14cm以下のものと考えられる。D柱穴は上縁で21cm×19cmの太さで，ほぼ垂直に近く約50cmほどほりこまれているが，立てられた柱の径は，その下底附近から考えて，やはり14cm～15cm以下であつたことが推定される。E柱穴は，上縁の径27cm×22cmで，少々くねつて掘りこまれているが，深さは55cmを測る。下底より10cm高いところで径約14cmを測るから，立てられた柱は前三者と同様それ以下ということになる。なおこの柱穴は発掘時においてその下底に水がしみ出してたまつていた。以上の周柱の柱穴に対して，中央柱ともいうべきA柱穴は，発掘前において，道路からの断面において観察されていた。この柱穴は，発掘に至るまでの間に既に崩壊し去り，詳しく調査することは出来なかつたが，幸いにも当時若干の図と記録を残していたので，それに基いて以下記述する。（才6図及び才5図版）柱穴はほぼ中央で道路によつて断ち切られており，太く深く掘り作られている点を特長とする。深さ約90cm，上縁の径約29cmで，下拡がり

露呈されたA住居址　（1）

露呈されたA住居址　（2）

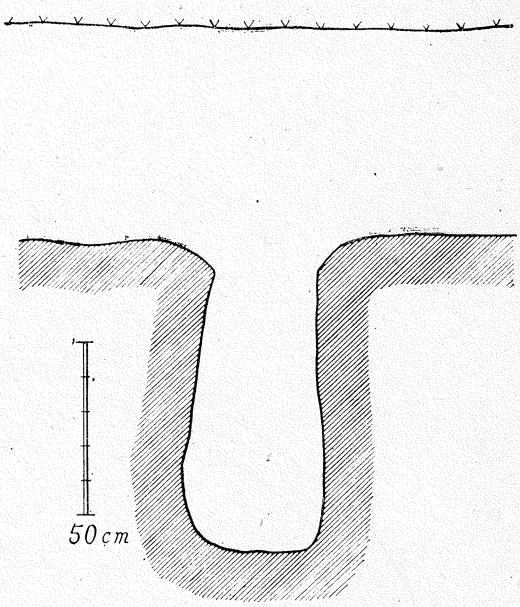



第5図　A住居址及び外周平面図　　Fig. 5

の袋穴状をなし，下方の最大径約40cm弱という大きなものである。下方に至るにつれて広くなつていることは，機能上の理由によるものであるとしたら理解に苦しむが，それはさておき，上縁部の径からして，ここに立てられた柱は，径28～29cm以下と考えられる。この柱穴の中の黒土中に，僅かな弥生式土器片が発見されたが，器形を示すようなものはなかつた。南北の壁からの距離は僅かに相異し，北壁周溝から約4m20cm，南壁周溝から約3m70cmと当時の記録は示している。中心よりも25cmほど南によりすぎている点が指摘される。これらを基にして，中央A柱穴の平面上における位置を復原したが，この中央A柱穴の中心から各周柱穴中心までの距離は，極めて興味ある数字となつて現れた。B柱穴との距離は3m44cm，C柱穴とは2m97cm，D柱穴とは2m76cm，E柱穴とは同じく2m76cmとなり，単に全体のプランにおいて南にずれているだけで

なく，周柱との関係でも明らかに南にややずれていることが判明した。なお各周柱穴間の距離から割り出されたF柱穴の推定位置は，B柱穴中心から中央A柱穴中心を結ぶ線の延長上には来ず，約40cmほど西へずれることも注目すべきであろう。

壁直下のぐるりに見出された周溝は，巾約10数cmから20数cmで，部分によつて若干の広狭が指摘される。深さも若干の深浅があり，西側の一部及び北側が深く作られ，南側は浅い。一般に巾が広い個所が深さも深いという関係を示している。例えば北側端付近で巾2～3cm，深さ12cm，南側端付近で巾16cm，深さ6cmという具合である。なお最深は13～14cmで最浅は5～6cmである。



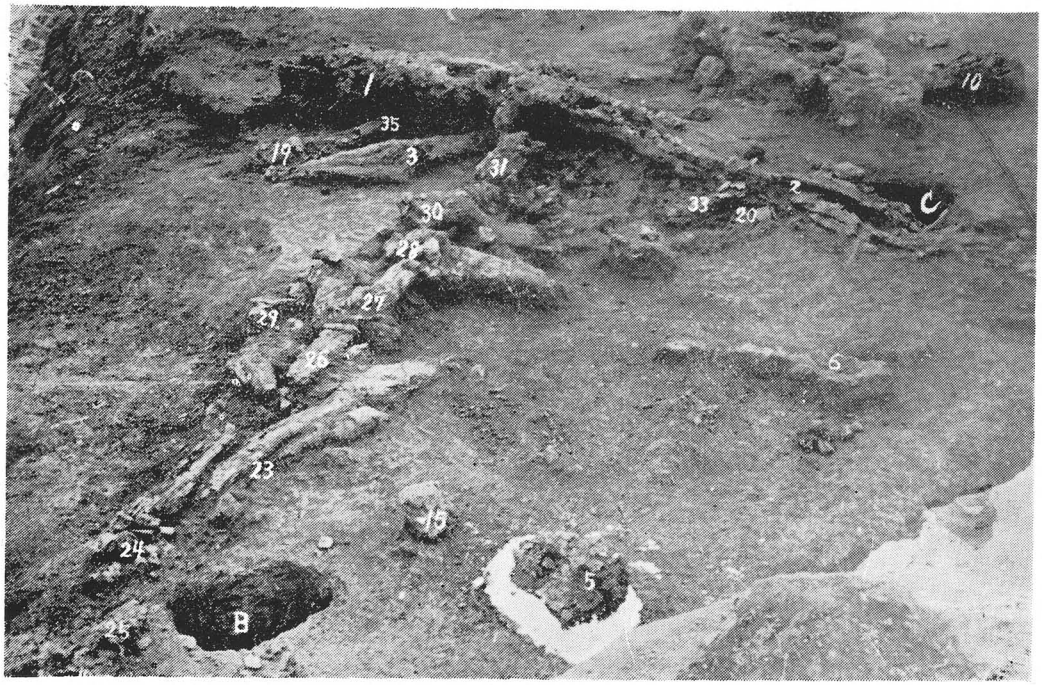

第6図　A住居址中央柱穴断面図　Fig. 6

以上のような構造をもつ竪穴に対して竪穴外周にどのような設備の跡が見出されるか，ということが常に私たちの問題であつたので，A住居址についても可能な限り外周の調査を行つた。その結果第5図に示したように計9ヶあまりの大小の穴及び若干の遺物を見出した。穴は円形，楕円形，不整形などさまざまであり，大きさにおいても大は径約60cm，小は径約12cmという具合である。深さは，赤土表面から測つて－5cmから－27cmまで，竪穴内の柱穴の深さに及ぶものはない。穴の内部の形状も一般に下狭まりで，不整なものが多い。更に分布位置は全く不規則といつてよく，何等の秩序なり方式を見出すことはできなかつた。なおこれらの内のあるものに，木の根の痕であるまいかと判断に迷うものがあつたが，その他の穴にしても，A住居乃至遺跡全体と時期的に関係をもつものであるかどうかについても，手がかりを得ることはできなかつた。従つてこれらの穴が，何らかの遺構を形成していたとしても，それ自身そして更にA住居址との関係において，その具体的な内容は不明とせざるを得なかつた。外周調査に際して発見された遺物は，黒土中から見出された僅かな弥生式土器の細片と5～6ヶの頭大乃至それ以下の小石であつた。土器片は住居外における破片の散布という以上の意味は考えられない。小石はすべて火をうけている痕跡があり，住居址北壁から約1m50cmほどはなれた一地点に存在していた。しかしその地点の土は焼けている状態を示さず，従つてやはり遊離した存在と見てよいように思われた。なお住居西側外周で，鉄かすと思われる塊を見出している。

この住居が使用されている間，火をたいたと考えられる跡が2ヶ所において見出された。1ヶ所は，B柱穴から約40cmほど西より，壁から約70cmはなれた個所で，約30cm四方の範囲が，赤

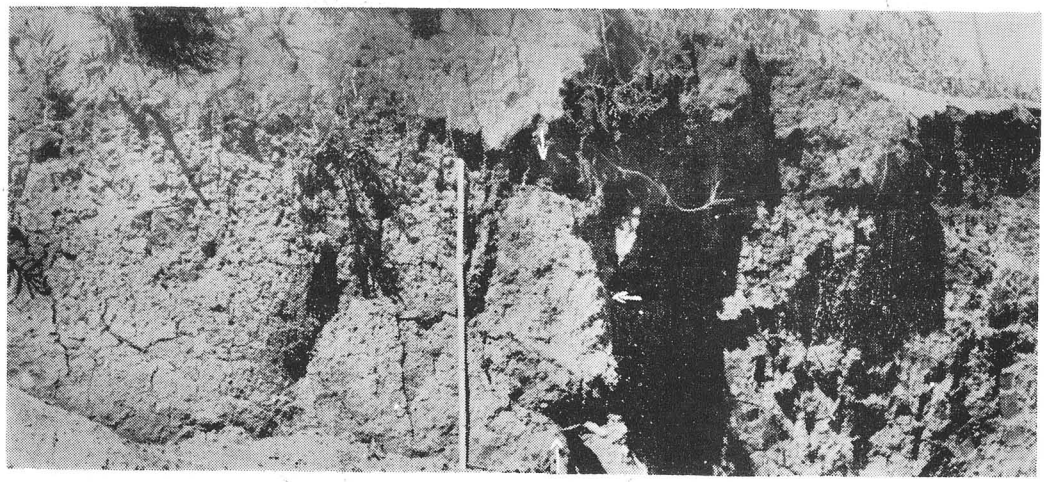
第7図　A住居址炭化構造材出土状況

Fig. 7

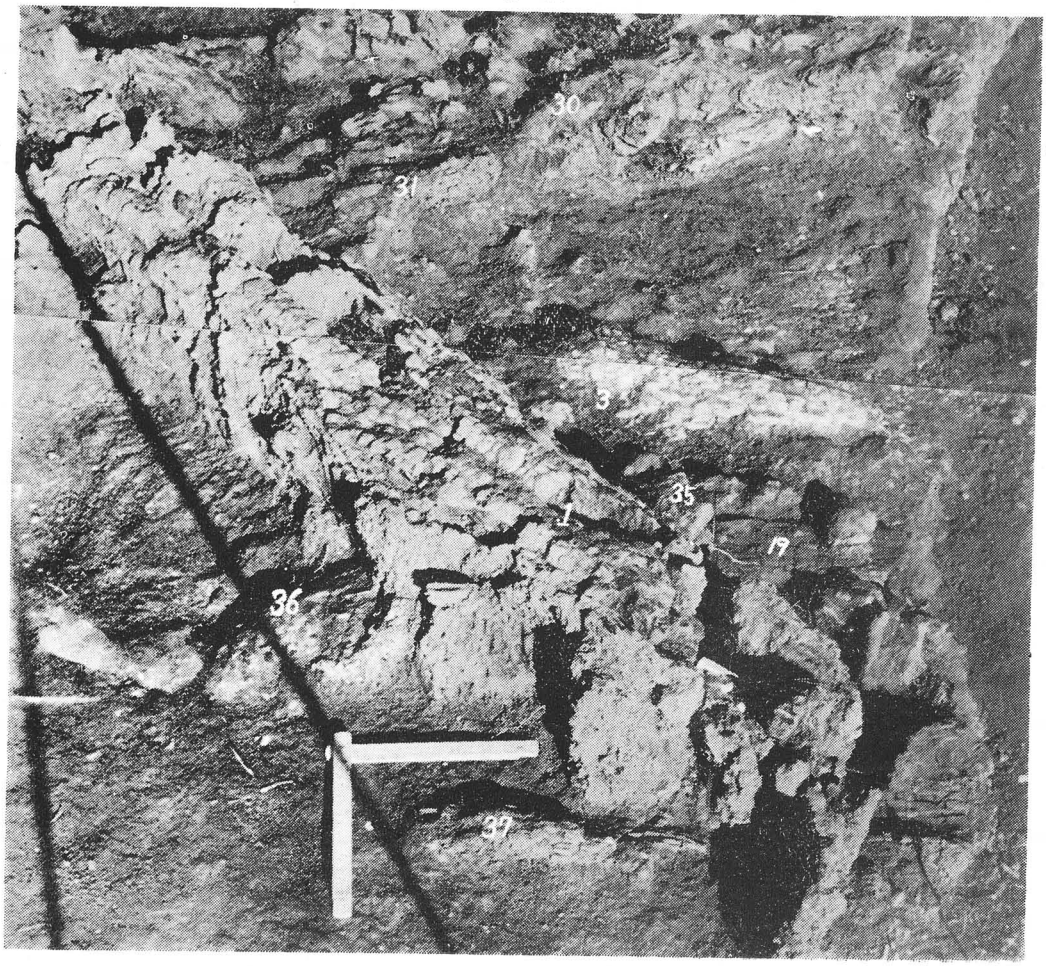



A住居址北半部の炭化構造材　（北から見る）

A 住居址炭化構造材の出土状況　（南から見る）



道路断面に露出されたA住居址中央柱穴　（矢印）

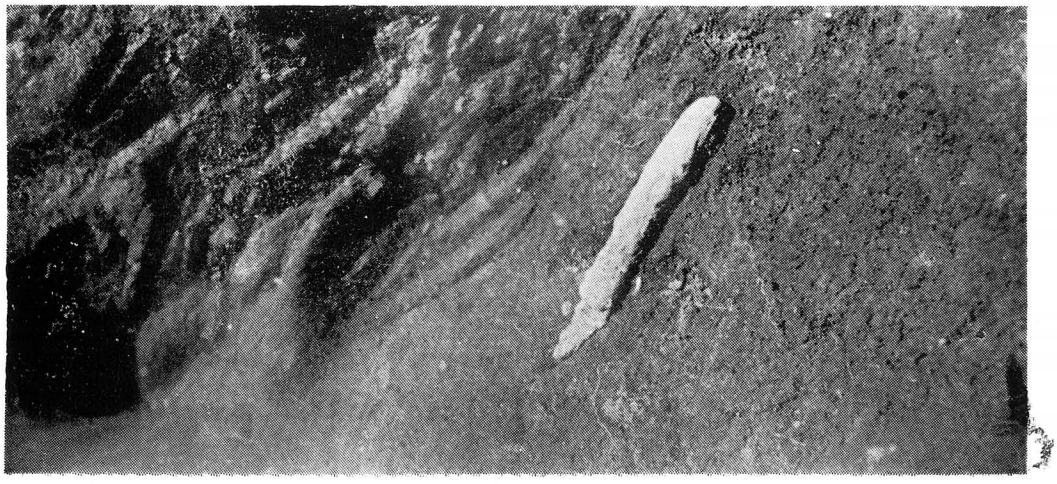



A住居址中央柱の倒壊状況　（南西から見る）

A住居址炭化構造材出土状態の部分　（1）（南東から見る）

A住居址炭化構造材出土状態の部分　（2）（東から見る）

A住居址炭化構造材出土状態の部分　（3）（西から見る）

同上　（4）（かやを取り除いたところ）

上　かや出土状態(1)　　中　かや出土状態(部分)(2)　　下　鉋出土状態